

本店レク議事メモ

日時：平成23年4月17日(日) 11:15~12:15

場所：東京電力本館1階101AB会議室

先方：記者約45名(カメラ5台)

当方：原子力設備管理部

本店広報部

配布資料：

- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて(4月17日 午前9時現在)
- ・福島第一原子力発電所 原子炉建屋内の現場調査計画について
- ・福島第一原子力発電所 1~3号機プラント状況 他
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況 他

冒頭、からプラント状況と作業予定等について説明。

質疑：

- Q. 3号機の原子炉建屋に入るロボットはどのフロアから入るのか。また、調査する意義は。
- A. タービン建屋1階の奥の二重扉から入り、電波が届く範囲で周辺の放射線量、温度、湿度等を測定する。格納容器については定期的にデータをとっているが、今回は作業員が入るエリアの環境について測定するもの。
- Q. 今回ロボットが入るエリアは水没していないのか。
- A. 水没しているという情報は入っていないが、そういった状況も含めて確認することとなる。
- Q. 今回のロボットを使用するのは、福島第一原子力発電所で初めてか。また原子炉建屋に入るのは初めてか。
- A. 高線量のがれき撤去作業の準備として、現場の写真撮影等で使用している。その後、5号機で本ロボットを使用して扉の開閉作業等のモックアップ試験を実施して問題がなかったことから、今回、3号機で用いてデータ採取するもの。
- Q. 一部の報道において、今後の工程表は本日の午後公表予定との情報がある

が、事実か。官房長官は数日中と言っていたが。

A. 工程表についてはまとも次第ご連絡させていただく。

Q. いつから作業を開始するのか。もう始まっているのか。3号機原子炉建屋に入った時間は。

A. 本日午前10時から実施予定であるが、作業実績について確認させていただき、改めてお知らせさせていただく。

Q. 3号機を優先させる理由は。

A. 重機等の準備が整ったことからかと思われるが、詳細については確認させていただく。

Q. ロボットはどこから操作するのか。また、何人で作業するのか。

A. 作業員は6名。操作範囲は800mであるが、具体的な操作場所は確認させていただく。

Q. いつまで作業するのか。

A. 今回の作業内容を踏まえて、今後、何がどこまでできるかを検討することとなる。

Q. ロボットからの電波はリアルタイムで届くのか。

A. リアルタイムで届く電波で状況を確認しながら遠隔操作する。

Q. 5号機で操作試験を実施した際は扉を開ける場合、どのくらい時間がかかったのか。

A. 確認させていただく。

Q. 二重扉を開ける危険性はどのように評価するのか。

A. 内側と外側の扉は原子炉建屋内の空気流入を防ぐ役割がある。状況を確認したうえで扉を開ける。

Q. 測定した放射線量等のデータが分かれば教えて欲しい。また、映像や画像についても提供いただくことを強く要望する。

A. 提供可能な画像があるかどうかについても確認させていただく。

Q. 2号機の水の移送予定は。

A. 本日は、準備が整い次第2号機から移送するためのホースの漏洩確認試験を実施する予定。

並行して、集中廃棄物処理施設の点検作業を行っており、原子力安全・保安院の確認ができれば、本日以降、移送することになる。

Q. ロボットのアームの長さは。

A. アームを仮に真っ直ぐにすると180cmであるが、強度の関係で真っ直ぐにすることはないと聞いている。

Q. 外側の扉はなぜロボットではなく、人が開けるのか。

A. 二重扉の外側扉までは人が入れるので、作業効率を考慮して外側扉は人が開ける。

Q. 作業する6名の内訳は。また、操縦者は東電社員か。

A. 訓練を積んだ協力企業作業員が操縦する。作業員の内訳は確認させていただく。

Q. 二重扉の内側扉の閉状態は確認しているのか。

A. 二重扉は片扉が閉まっていないと逆側の扉が開かないようなインターロックがかかっていることから、内側の扉は閉まっていたと考えている。

Q. 爆発の影響で異常があり、外側扉を開けた段階で不具合が発生するというリスクはないということでしょうか。

A. その点もふまえて作業前の環境確認を行う予定。

Q. 測定した結果が良かった場合、今後、原子炉建屋内でどのような作業をしたいと考えているのか。

A. 今後の復旧作業において原子炉建屋内に立ち入ることが必要になるため、現段階では線量が高いと想定しており、今回は人ではなくまずはロボットが入り、中の状態を確認する。把握した線量の状態をふまえて、人で作業が可能かどうか、人が作業する場合にどのような対処が必要かが見えてくる。その第一ステップとして状況を確認するもの。

Q. その先のステップとしてどのような作業を想定しているのか。

A. その点については詳細を詰めていくことになるが、人が入れなくてもロボットが入れる範囲で配管等の状態も確認できるのではないかと思う。まずは

第一ステップとして、ロボットが入って原子炉建屋の状態を確認するもの。

Q. モックアップ試験を実施した5号機は3号機と二重扉の形状が似ているから、試験を実施したということによいか。

A. タイプとしては3号機、5号機ともに同系列の原子炉なのでほぼ同じ形である。

Q. 扉は重いものか。

A. 重量は重いロックが外れればある程度の力で開く。

Q. がれきがあった場合、ロボットは乗り越えて行けるのか。

A. アイロボット社のホームページを確認した限りでは、60°程度の傾斜を登る性能を有しているとのことなので、がれき等の上は登って行けるものと思われる。

Q. 防水性は有しているのか。

A. 防水性については確認できていないが、今回は水の無いエリアで作業する予定。

Q. 遮蔽性の高い建物の中でも操縦の電波は届くのか。

A. 詳細な場所は確認させていただくが、タービン建屋から比較的近い所で操縦することと思われる。

Q. 今回の調査が成功した場合、1、2、4号でもロボットによる調査を行うのか。

A. そのように考えている。

Q. ロボットによるR/Bの調査を行うタイミングが遅いのではないか。

A. ロボットの提供を受けた後、アイロボット社から技術指導を受け、その後小名浜CCで1週間の訓練を行い、4/1から1Fで使用し始めた。また、今回、原子炉建屋での調査に使用するにあたり、5号機でのモックアップ試験を行った。

Q. なぜ、アイロボット社の社員が1Fでの作業を行わないのか。その方が間違いがなく、また早いのではないか。

A. 確認する。

Q. ロボットにより、水のサンプリングはできないのか。

A. 現時点では予定がない。

Q. 防水性についてはどうか。

A. 確認する。

Q. 2号トレンチの水位が上昇しているか、緊急避難的にどこかに移送する計画はないのか。

A. 上昇は2~3cm/日であり、20日~30日位の余裕があり、緊急避難的なことは考えていない。本日、集中ラドの耐圧試験を行い、その後保安院による確認が実施されるが、すべてが今日中に終わるかは不明。

Q. 2号トレンチから集中ラドへの移送にあたり、テストランを行うと思うがその際には1号トレンチの水を使うのか。

A. その通り。

Q. 本日のロボットの作業においては、配付資料の図に示されている二重扉のうち、下側だけを開けるのか。

A. その通り。

Q. 当該ロボットの価格は、市販されているのか。

A. 確認する。

Q. 窒素注入にもかかわらず、1号機の炉圧は下がってきているが原因は。

A. 入れている窒素量は変わっておらず、原因については検討中。

Q. 窒素注入を終えるタイミングはいつか。

A. 180~190kPaabsで安定しており、今後も継続して注入を続ける予定。

Q. 窒素注入を停止した場合、炉圧が下がっていくという認識か。

A. そのように考えているが、これまでも注入停止をしており、急激に炉圧が下がることはないことを確認済み。

Q. 2号ピット全面の海のヨウ素の数値が増えているが、新たな流入経路があるのではないか。また、NISAは新たな流入経路の可能性を認めているが、そ

れについてはどのように考えているのか。

A. 2号ピット脇の数値を確認して、夕方の会見時に報告したい。

Q. マニピュレーターとは何か。

A. アームのこと。

Q. 酸素濃度を測る理由は。水素濃度は測れないのか。

A. 確認する。

Q. トレンチとT/Bの水位、また、格納容器内の温度について示してもらえないのか。

A. 毎日夕刻の発表資料である“福島第一発電所の状況”に含める方向で調整中。

Q. 初期の作業員の線量を再計算するとのことだったが、

A. 確認する。

Q. ロボットの型番は。

A. 確認する。

以上

小資報共有

会長会見メモ

(6枚)

勝俣会長会見概要 (収束へのシナリオ)

日時 平成23年4月17日(日) 15:00~16:30

場所 東京電力本館3階大会議室

先方 記者約200名(カメラ18台)

当方 勝俣会長、武藤副社長、

質疑

- Q. 原子炉の冷却について、2号機の原子炉格納容器への注水は行うのか。
- A. 燃料域上部まで原子炉格納容器を水で満たすことで冷却することが基本だが、2号機は原子炉格納容器が損傷している可能性が高く、タービン建屋等に高レベルの放射性物質が流出しているため、注入量と流出量のバランスを検討していく必要がある。損傷箇所密閉後は1・3号機と同様の冷却策を実施してまいりたい。
- Q. 4号機の使用済み燃料プールを支えるための「建屋底部の支持構造物の設置」とは具体的にどのようなものか。
- A. 4号機については、建屋の構造自体は保たれていると認識しているが、プールを支える建屋の壁が損傷しており、念のためプール底部に支持構造物の設置を検討している。
- Q. 燃料の取り出しの具体的な想定時期は。
- A. 1、3、4号機について、最上階が破損している状況であり、外部から注水を安定的に行うためには、格納容器を取り囲む大きな構造物が必要であるとともに、周辺の瓦礫を撤去する必要がある。また、現時点では、通常の冷却ラインを復旧させることを検討しているものの、仮に復旧ができない場合、熱交換器の設置に着手する予定だが、その具体的な見通しは、現時点ではお示しできない。原子炉を安定して冷却するためには上部まで水で満たすことが必要であるが、放射線レベルがまだ高いのでそこで作業できるのかというリスクもあると考えている。
- Q. 多くの対策を実行していくとのことだが、どの程度の費用が必要で、調査はどのようにする考えか。
- A. 当社は、このたびの事故を収束させることに全力を挙げているところであり、まず考えられる対策をとりまとめ、その内、実施可能なものから順次行っていく予定である。費用については、現在、計画を策定している段階であり、お示しすることは難しい。
- 手許資金は2兆円強程度となっているが、これは、主に、今回の被災により、23年度に増加すると見込まれる燃料費や復旧費用および社債や借入金の償還・返済に充当することを目的として、複数の金融機関から緊急融資の支援を受けたものにより確保したもの。復旧費用や事態収束に向けた費用については、現時点で総額がどの程度となるのか把握できていない状況の中、当面はこの手許資金で対応していく予定。

- Q. 福島第一5・6号機については、燃料を取り出した後に、廃炉にすることを検討しているのか。
- A. 現時点では実態を詳細に把握しておらず、状況を見た上で判断していきたい。
- Q. 「福島第一原子力発電所・事故の収束に向けた道筋」では、STEP1で3ヶ月、STEP2で3～6ヶ月を目安として挙げられているが、その具体的な根拠は。
- A. 2号機の原子炉格納容器にどの程度損傷があるのかにもよるため、目標の期日に絶対的な保証はないが、目的にかなうものを選択し、できる限り早く行っていきたい。
- Q. 「1・3号機の原子炉格納容器内を水で満たす」ということだが、今後、注水量を増やしていくということか。
- A. 水量を増加させる際、冷温化により格納容器内の水蒸気が凝縮、水素の濃度が高くなり水素爆発する恐れがあるため、窒素を注入し、水素爆発の危険性を低下させることが重要である。また、2・3号機についても、窒素の注入を開始したいが、2号機については、原子炉格納容器の損傷の可能性があり、注水した水が漏洩することも考えられるため、状況について精査してまいりたい。窒素の注入についてはできるだけ早く行いたいと考えており、2・3号機についても今月中には行いたい。
- Q. 対策にベントに関する記載があるが、どのようなケースを想定しているのか。
- A. 原子炉格納容器の圧力が上昇した際に実施することも想定されるが、現時点では、可能性は低いと考えている。仮にベントを行う際は、放射性物質の排出が極力少なくなるようフィルターを活用していく。
- Q. 放射性物質の海洋放水について、今後は実施しないということか。
- A. まずは2号機の高レベル放射性物質を漏洩させないことが重要である。低レベルの放射性物質については、除染を行うことにより、問題ないレベルまで低下させていくが、処理が未実施のものについては、メガフロートや仮設タンクを用いることで保管していく。なお、規定に基づいて濃度を下げた海洋放出は今まで通りだが、高濃度の放射性物質の海洋放出については行わない。
- Q. 福島第一周辺の避難住人の帰宅は、どの段階で可能だと考えられるか。
- A. 避難解除については政府の判断となるが、当社としては、避難されている方々のご帰宅の実現に向け、政府にご判断や見直しをたてていただけるような客観的なデータをお示しするとともに、発電所敷地外での除染やモニタリングなどの対策について、できる限り取り組んでまいり所存。

- Q. 今後の取り組みにおいて、電源喪失を伴う津波の可能性については、想定しているのか。
- A. 注水を維持できるよう、注水ポンプおよび外部電源の代替として、消防車、電源車および機材等を、このたびの津波よりはるかに高い高台に設置している。
- SQ. 防潮堤の設置は検討しているのか。
- SA. 防潮堤の設置については時間がかかると思うが、様々な対策を検討していく必要があると考えている。
- SQ. またこのたびと同様の津波に襲われた場合、今回示されたシナリオは見直すのか。
- SA. 一概に申し上げるのは難しいが、非常に大きな津波が発生した場合は、見直しも必要になると認識している。
- Q. 株主総会が通常6月に行われている一方、STEP 2の終了が最短で来年の1月であるが、このたびの事故に対する経営責任を取る時期について、どのように考えているか。
- A. このたびの事故には責任を感じており、然るべき時期に責任を取る必要があると考えている。経営幹部が責任を取って辞めるという考え方が一方、辞めずに引き続き経営を行っていくという考え方もあるが、個人的には、退く方向で検討している。
- Q. 前回の勝俣会長の会見で、「事故調査委員会では意志決定のプロセスを確認する」との発言があったが、その後の進展はどうか。
- A. 社内や統合本部でのやり取りを調査しており、今後、事故調査委員会を設置して精査していくことになると考えているが、現時点では、福島第一での状況について聴取できる状況にない。
- Q. このたびの原子力事故に関する費用は電気料金に含めていくのか。
- A. 今回の事故に対する復旧や賠償にかかる費用は現時点で未定であり、お伝えできる段階にない。
- Q. 補償について、事故保険の約款を公開する考えはあるのか。設備の補償に重点を置いた事故保険であるならば、被害者への救済は税金からという懸念も出てくるがどうか。
- A. 損害賠償のスキームは、今後、構築されるものであり、現時点で、申し上げる段階にない。

- Q. 対策⑩に「4号機の耐震性を評価 一定の健全性が保たれていることを確認」とあるが、この根拠は。
- A. 解析モデルを用いて検証した結果、水平方向で200数十ガルには耐えられることを確認しており、現時点で不安定な状況にはないが、念のためプール底部に支持構造物の設置を検討しているもの。ただし、原子炉格納容器内が高温にさらされた可能性もあり、設備への影響も考慮しなくてはならない。
- Q. 株主総会において、会長・社長が同時に退陣する可能性もあるのか。
- A. 当社は現在、会社設立以来最大の危機的な状況であり、原子力発電所の事故の終息と、それに伴う財務上の手当を行っていかなくてはならない状況である。経営責任は感じているが、辞めるにあたってどのような方法がベストか、清水社長とも相談した後に判断したい。
- Q. 原子炉建屋カバーおよびコンテナの設置はいつ終了するのか。
- A. 現在、基本設計を始めているところであるが、現時点では、具体的な時期は未定である。鉄鋼構造で、周りを、換気機能を有したシートで覆ったもので、風や地震に耐えうる構造になる予定である。
- Q. 国からは「住人が再び住めるよう、福島第一周辺の土地の改良などの対策も検討している」との発言もあったが、東電も同様の認識か。
- A. その通り。
- Q. 「避難指示区域には、しばらくは住めない」との報道があったが、東電としての認識は。
- A. 避難解除については政府の判断となるが、当社としては、避難されている方々のご帰宅の実現に向け、政府にご判断や見通しをたてていただけるような客観的な事実をお示しするとともに、発電所敷地外での除染やモニタリングなどの対策について、できる限り取り組んでまいり所存。
- Q. 株主総会で、このたびの事故を想定した安全対策を実施したほうが良いという意見は、大口株主から出たことはあるか。
- A. 詳細は把握していないが、今までなかったと思う。
- Q. 原子炉内の冷却を行うにあたり、注水と漏洩排水のバランスについてどう考えているのか。
- A. 燃料域上部まで原子炉格納容器を水で満たすことや原子炉の熱交換機能を回復させることを基本としていきたいが、2号機については原子炉格納容器の損傷の可能性もあることから、移動した留流水の除去、水処理施設での高レベル汚染水の除去および、塩分処理した水の保管等を検討している。

Q. 原子炉建屋やタービン建屋の線量をいつまでに低下させる予定か。

A. 4号機には実際に入って状況を確認しているが、1～3号機については、ロボット等を用いて線量等の確認を行った後に作業を行う予定であり、線量測定の結果については、改めてご報告したい。

Q. 損害賠償を支払うための資産売却についてどう考えているのか。

A. 損害賠償について、現時点で、国のスキームも決まっておらず、当社から具体的にお答えできる状況にないが、資産売却や人件費削減を含めて合理化を行っていきたいと考えている。

Q. 福島第一周辺に住人の帰宅は、「福島第一原子力発電所・事故の終息に向けた道筋」のどの段階で示せるのか。

A. 放射性物質の流出が止まっても、今まで流出した放射性物質による影響が現時点で不透明であるため、具体的な時期については不透明であるが、STEP 2の段階では、何らかの形でお伝えできるようにはしていきたいと考えている。

Q. 課題⑥「環境の安全性を継続して確認・お知らせ」の達成にはどの程度の時間がかかるのか。

A. STEP 2が終了する6～9ヶ月後には見通しを示す事ができるよう、STEP 1・2をしっかりと取り組むことが重要であり、放射能による影響を低下させるため、全力で取り組む。

Q. 勝俣会長や清水社長の後継者について、内部から昇格させるのか、それとも外部から招聘するのか。

A. 現時点で決まっているものはない。

Q. 福島第一が収束したら、福島第二を再稼働するのか。

A. 物理的に可能な状態にすることはできると思うが、地域住民のご意見等もお聞きした上でのこととなる。

Q. 清水社長は、先日の会見で、ベントの時期や海水注入の時期について、「ベストな判断だった」と発言しているが、勝俣会長はどのように考えているのか。

A. ベントについて、平時であればスイッチ一つで行えるものであるが、当時は、現場の汚染量が分からない状況であることに加え、通信も途絶えており、暗闇の中、実際に建屋に入って作業を行っている。時間がかかったのは事実である一方、早期から準備を行った上で、ベント作業を行ったのも事実である。詳細については、今後の事故調査委員会で検討していく。

Q. 合理化策について、人件費・資産・所有株式等の具体的な削減案は。

A. 現在検討している段階であり、今すぐに発表できるものではない。

Q. 東北電力との合併についてどのように考えているか。

A. 考えていない。

Q. 今夏の供給力確保に向けて、先日公表した見通しから、さらなる揚水発電の積み増しの可能性はあるのか。

A. 現在、経年火力が 24 時間運転可能かチェックしている段階であることから、揚水の更なる活用については、今後、検討してまいりたい。

Q. 「福島第一原子力発電所・事故の収束に向けた道筋」は、それぞれの号機の現状を踏まえた計画なのか。現状をどのように認識しているのか。

A. 1～3号機の燃料ペレットの一部は損傷しているが、注水により冷却できていると認識しているとともに、現時点の注水量は、崩壊熱の除去に十分効果があり、安定して冷却できていると考えている。今後はより安定して冷却するために、さらに多量の注水を進めていくことを考えているが、排出される水量とのバランスを考慮する必要があると認識している。

Q. 国が進めている補償のスキームに対して、東電は具体的にどの程度ならば捻出できると考えているのか。

A. 国のスキームが決定しないと答えできない。ただし、全額東電ということは厳しいと考えている。

Q. 経営責任について、「然るべきとき」とは、株主総会のことか。

A. 一般的には、株主総会で責任をとるものと考えているが、具体的な時期を含め考えておらず、今は事態の収束に全力を注いでまいりたい。

以上

情報共有

(8枚)

東京電力(株)

会見概要

日時：4月17日(日) 19:00~20:25

場所：東京電力本館3階ABC会議室

記者：記者80名(カメラ9台)

- ・福島第一原子力発電所の状況
- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて【4月17日 午後4時現在】
- ・福島第一原子力発電所2号機取水口付近からの放射性物質を含む液体の海への流出について(続報13)
- ・福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について(第二十三報)
- ・福島第一原子力発電所付近の海水からの放射性物質の検出について(第二十五報)
- ・福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について
- ・福島第一原子力発電所 1~3号機プラント状況 他
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況 他
- ・福島第二原子力発電所モニタリングによる計測状況

冒頭、XXXXXXXXXXから各資料の説明および、3号機のロボット作業の概要等について説明。

質疑：

Q. 昨日測定したロボット作業エリアの線量は。

A. 1号機の二重扉外側で4mSv/h、二重扉内側で200mSv/h、3号機の二重扉外側で2.1mSv/h、二重扉内側で10mSv/h。

Q. 1号機と3号機でかなり違うが理由は何か。

A. はっきりしたことは言えないが、1号機の方で何らかの漏洩があったのではないかと。

Q. 2号機のバースクリーンの調査だが、保安院の指摘でヨウ素とセシウムの半減期が異なるため、同じようなペースで上がったり下がったりするのはおかしく、どこかに漏えいがあるのではないかとのことだったが、どのように考

えるか。

A. たまり水という状況だとヨウ素の方が早く減衰するが、今回のように海洋での拡散が考えられる場合はそちらの影響の方が大きいのではないかと。実際にサンプリング結果を見ても、ヨウ素において、従来であれば8日かかるところ1日で半減しているなど、拡散の影響が見受けられる。14日にシルトフェンスを入れて以降、拡散のスピードが遅くなったと考えており、一時的に上昇し、今後はシルトフェンスの影響も受けつつ拡散するということになる。従って、ここからは拡散の影響と減衰の影響のどちらかが顕著に表れてくるのではないかと考えている。

Q. ロボットが3号機に向かったのは午前中か。

A. その通り。

Q. その後、1号機に行ったのか。

A. 3号機が終わった後に向かったと聞いている。

Q. 使用済燃料プールの電源供給が止まったということについて詳しく教えてほしい。

A. 一般的な配電の設備を発電所の人間も使えるようにと訓練を行っていたところ、ケーブルの先がきちんと養生されておらず、スイッチを入れた際に短絡し、大元のブレーカーが落ちたもの。大元のブレーカーは共用プールも繋がっており、共用プールへの電気供給も停止した。

Q. 工程表の関係。福島の方々への説明は行っているのか。

A. 県の原子力関係部門は事前にご報告している。県民の皆さまにどのようにご説明するかについては未定。避難されている方においては、いつ戻ることができるかが関心事と思っており、できるだけご説明差し上げる機会をつくりたいと考えている。

Q. 炉圧の件。1号機においてD/Wの圧力が下がってきていること、S/Cの圧力が上がってきていることについてどのように評価しているか。

A. まだ、数kPaのオーダーなので、経過観察をしている段階。

Q. プレッシャーを与え続けることによって、穴が開いてしまったのではないかと。

A. 可能性が全くないわけではないと思うが、ご指摘の点も評価の対象に加え

たいと考えている。

Q. 200mSv という数字は予想より低かったのか。

A. 予想がどうかとうより、数値として高いと考えており、何らかの漏洩のよ
うなものがあるのではと考えている。

Q. 飯館村で高い放射性物質が確認されているが、ベント由来なのか。

A. 放射性物質が飯館村の方向に拡散していることはデータや解析で出ている
が、いつの時点で出たものかについては今の時点では判別できていない。

Q. 写真のデータを見ると、1・2枚目と3枚目の撮影時間に40分程の開きが
あるが、3枚目は戻ってきたときのものなのか。

A. 確認。

Q. 1号機はかなり放射線量が高いように思うが、1号機もロボットによるR
/Bの現場確認をやるのか。

A. 測定された線量は作業エリアの中での最大値ということであり、被曝しな
いように扉の陰に隠れながら実施するなどする。

Q. 3号機については予定をしていた調査はできたと認識してよいか。

A. 本日実施した作業は確認して明日ご連絡する。

Q. 共用プールに入っていた燃料集合体の数は。

A. 6,375 体。

Q. 写真は2代目のロボットが撮ったのか。

A. 人が二重扉の外側から撮った。

Q. 1号機トレンチ水を使った集中ラドへの移送のリークチェックは中止した
ということだが。

A. 2号機の溜まり水を集中ラドに本日移送できないことが判明したことから、
直前にやった方がよいと判断し、本日は中止した。

Q. 工程表は、公表されたものを事前に保安院に提出しているのか。また、そ
の時の保安院の感想は。

A. 同じものを保安院に提出している。

Q. 工程表の時間軸の根拠となるような資料は保安院に提出したのか。また、提出する予定はあるのか。

A. これ以上の資料はない。場合によっては保安院から報告徴収などの形で今後提出を求められることになるかと思う。

Q. 工程表が今日出た理由は。すでに4月の中旬にはできていたのではないか。

A. なるべく早く工程表を作成したいと考えてきており、また、4/11に菅首相から今後の見通しを提出するようご指示をいただいていた中、今日という段階でまとまったので公表したもの。

Q. 住民の目線で考えると、3ヶ月、6ヶ月となると、非常に長いスパンだと思ってしまうのではないか。

A. 作業環境の問題が一番のネックになる。また、必要な資機材を整える必要がある。このようなことから作業全体を見通すことが難しい。3ヶ月かかってもいいということではなくできる限り達成するよう頑張っていきたい。

Q. 逆に、リスクという観点で見ると、本当に工程表で示されているようなスパンでできるのかとも思う。

A. リスク低減対策を打ちリスクを顕在化させないことが我々の使命と認識。具体的には、水素爆発については窒素注入を実施、電源系については津波対策などを実施している。これらのことを実施した上で、3ヶ月、6ヶ月という工程を引いているもの。いずれにしても、全力を挙げて少しでも早く終わらせていきたいと考えている。

Q. ロボットのカメラの台数について。

A. 先行車両は5台、後続車両は4台のカメラを搭載している。

Q. 線量の計測ポイントとは。

A. 外扉の外側の上、中、下などを測定し、先ほどはその最大線量をお伝えした。内扉の外側についても同じ。

Q. 共用プール人為的な確認ミスがあったということか。また、共用プールにのみ影響があったという理解でよいか。

A. 作業前にきちんと確認をする、養生をきちんと行えば起こらなかった問題と考えている。また、本件は使用済燃料プールのみに影響。電源復旧後もプー

ル水温 33 度であり、問題なく冷却できていると考えている。

Q. T/Bの地下のたまり水は、以前線量を測った際、1号機は低く、3号機は350mSv/hと高かったように記憶している。今回の測定値と逆転していることについてはどのように考えているか。

A. 現時点では測った数値であり、この評価については時間をいただきたい。

Q. 1号トレンチから集中ラドへのテスト送水を中止したとのことだったが、保安院の確認がとれなかったことから中止したのか。

A. いいえ、集中ラドの止水工事を実施中であり、現段階で移送できる状況ないと認識したため。

Q. 保安院の確認はいつとれるのか。

A. 日程については未定。

Q. 以前は1~2日で終わると聞いていたが、未定ということでもいいのか。

A. かまわない。

Q. 工程表。現場の作業環境がネックになって先を見通すことが難しいということだったが、将来的な線量の推移についてどのように考えているのか。

A. 現時点では少なくともT/Bの溜まり水を移送することが重要と認識。ただし、建屋の線量の低減についての具体的な見通しは現時点ではない。

Q. 線量が下がらないことにはその先が見通せないということだが、3・6ヶ月の根拠らしいものがみえないがいかがか。

A. 現時点でT/Bの溜まり水について何日頃までにとすることはできないが、3ヶ月かかるとも考えていない。

Q. 線量の低減の見通しが立たない、2号機の移送もいつになるかわからないがとりあえず全部合わせて3ヶ月としたということではよいか。

A. 現在ではそのような見通しを持っているが、ロボット等を投入して原子炉建屋等の内部の確認を平行して行っており、作業可能だということが確認とれれば原子炉建屋に行くことも可能と考えている。

Q. 水処理はどのくらい時間がかかるものなのか。

A. 仮置ききのタンク、メガフロートなど貯める設備を順次整えていく。5月末

までに27,000トンと申し上げたが、引き続き6月以降についても調達を進めている。また、水処理については、ゼオライト、フィルターなどを用意し、高濃度の水が低濃度になり廃液をためるなど処理がしやすくなる。

Q. 本日公表した工程表のスケジュールについてこれが最短であると判断した経緯は。

A. 工程表については、様々なオプションの中から検討した結果であるが、現時点で原子炉の冷却についてはまだステップ1の段階で、格納容器の状況を確認しながら燃料の上端まで水を入れるということが決まっているだけである。

その後のステップ2で取りうるオプションはたくさんあり、外置きの熱交換器や、RHRをどう活かしていくかということは3ヶ月以降となる。

Q. その他にも石棺等の選択肢がある中でこの方法がベストと判断した理由は。

A. 冷却、モニタリング、除洗という3つの分野で整理した中で、冷却の部分では冠水させることが一番の近道と判断した次第。放射能の抑制であれば、水処理と建屋からの漏出防止という観点であり、建物を覆うということが最大の方法であると判断した。しかし、それは3ヶ月程度で出来るものではないので、クリコートの実施、がれきの撤去を実施して飛散防止に努めている。

Q. 2号機サブドレンのヨウ素濃度が横ばいになってきたので、高濃度の汚染水が継続して流出しているわけではないとのことだが、どのようなことが考えられるのか。また、サブドレンから2号機タービン建屋地下に水が入っているのではないか。

A. サブドレンのヨウ素濃度が上がっていないので、タービン建屋にたまっている $10\%/m^3$ の濃度の水が、サブドレンに入っているのではないかと思っている。サブドレンの水がタービン建屋に入っているかどうかについてはよく分からないが、建屋にひび等があつて地下水が入っている可能性はある。

Q. 1号機の二重扉の外側の線量が高いのは、封入している窒素とともに放射性物質が出ている可能性があるのではないか。

A. 窒素封入の影響で原子炉格納容器の圧力が大気圧より高いため、格納容器の貫通部の気密性の悪い所から漏れている可能性もあるが、今回初めて測定したため窒素封入前後の線量の変動がわからず、現時点で原因は特定できていない。

Q. 集中廃棄物処理施設は本日も止水工事はいつ終わるのか。

A. 集中廃棄物処理施設は、一部地下水からの漏出があり、本日の止水工事を実施しており、終了時期をお示しできる段階にない。

Q. 明日の参議院予算委員会に清水社長は出席する予定でいいか。

A. 現時点では出席させていただく予定と聞いている。

Q. 集中廃棄物処理施設の止水工事は遅れ気味か。

A. 細かな工事を継続して実施しており、高レベルの水を受けるため、しっかりと止水工事を実施していると聞いている。

Q. 二重扉のガラスの小窓は鉛ガラスか。

A. 普通のガラスだと思う。

Q. そうすると、ガラスの向こう側も同じような線量か。

A. そう思われる。

Q. 工程表の対策10で「ベントが必要になった場合、フィルタを活用した軽減策を実施」とあるが、通常のベントはフィルタがなかったが簡単にできるのか。簡単にできるのであればなぜ今まで実施しなかったのか。

A. 格納容器のベントのラインは、非常用ガス処理系という系統内にあるチャコールフィルタを経由してベントするラインと、今回事故時に使う格納容器の耐圧のベントという二つのラインがある。

通常、格納容器をベントする場合は、放射性物質を外に放出しないために非常用ガス処理系のフィルタを経由してベントを実施する。今回、格納容器の圧力が低いので、非常用ガス処理系が使用できれば、チャコールフィルタを通してベントすることが可能になるのではないかと考えているが、弁や配管の状態を確認して実施することになる。

Q. 事故時に耐圧ベントをするのは、速やかに圧力をすぐに抜くためということか。

A. いえそうではなく、もともと耐圧ベントはシビアアクシデントという格納容器が壊れる可能性がある事態まで事象が進展した際に格納容器を破裂することから守るためのベントである。チャコールのあるベントは通常運転中もしくはそれより少し圧力の高い設計圧なので、格納容器が壊れるほどの圧力の気体を流すと非常用ガス処理系自体が壊れてしまうため、こちらの方は格

納容器の設計圧の2倍を超えるような場合は使用できないため、今回実施したベントは耐圧ベントを使用している。

- Q. ステップ1の中で「窒素の注入を続ける」「格納容器を水で満たす」と記載されているが、具体的にいつの断面で窒素を水に置き換えていくのか。
- A. 現時点で検討中で、水の量を増やすと格納容器と圧力容器の気層部分の体積が減るので、中の気体を押し出す状態になる。一方、水が増えるので冷却する効果が増えるので、バランスを取りながら実施してまいりたい。

上記質疑の後、XXXXXXXXXXから本日の作業実績と明日の作業予定等について説明。

以上